

## 真杉静枝の「花樟物語」三部作とその台湾表象

一九六

呉 佩 珍

### 1. はじめに

真杉静枝は、一九〇〇年に福井県に生まれ、後に父・真杉千里ら家族と一緒に台湾へ渡り、定住し始めた。二一歳のとき、親決め結婚をさせられ、のちにその生活に耐えられなくなり、大阪の祖父母の元へ出奔した。その後、大阪毎日新聞の記者になり、武者小路実篤と知り合ったことがきっかけで、日本文壇にデビューした。彼女は、台湾での生活経験を有する少数の日本女性作家の一人である。

真杉静枝はデビューした当時、すでに台湾を題材とする作品を創作していた。最初の作品集『小魚の心』（一九三八年）に収録されている「南海の記憶」、「南方の墓」などは、その例である。一九三七年、日中戦争の全面勃発にしたがい、台湾が南進基地として前面化された時期に、真杉静枝の台湾描写にも変化が現れ始めた。一九四一年に出版された『ことづけ』と『南方紀行』は、一九三七年の日中事変以後、南進基地としてますます重要視されてきた台湾を意識し、創作されていた作品集である。この時期、「国策小説」のようなものが殆どで、台湾の皇民化運動を鼓吹する作品が多かった一方、初期作品の「台湾殖民地における女性」の主題は依然として作品の中心となっている。

『ことづけ』は、当時の「日本の南進政策にのって南方を扱った多くの文学作品が刊行されていく中で増刷を重ね、四二年九月には四刷

三〇〇〇部を発行するに至った」という<sup>①</sup>。この時期の「南進関係」小説の人気は、『ことづけ』に次いで、一九四一年六月に、『南方紀行』がさっそく出版されたという事実からも垣間見える。

一九四五年八月一五日の日本敗戦と同時に、台湾が日本の植民地から離脱した。その後、真杉静枝は、自らの家族史という視点から、日本による領台以後の歴史と二重写ししながら、「台湾」を描いていた。明治末期に台湾に渡って、日本敗戦に伴い、引揚者になった左門治と千代という夫婦の一連の物語、「花樟」（一九四六年）、「左門治と千代」（一九四七年）と「老脚の賦」（一九四八年）が、「帝国日本」と「植民地台湾」との関係を経史の線軸で見直したものである。本論文の目的は、「花樟」、「左門治と千代」と「老脚の賦」を通して、真杉静枝の家族史からみる「台湾殖民地史」、そして台湾描写の変容を検証することにある。

### 2. 左門治と千代の物語

#### —「花樟」、「タバニ事件」をめぐる家族史

「花樟」（『東北文学』一九四六年三月四月）、「左門治と千代」（『東北文学』一九四七年一月）と「老脚の賦」（『仇ごよみ』一九四八年）は日本の敗戦直後、真杉が台湾を描いた作品である。「花樟」と「左門治と千代」は、作品の結末の注記によると、それぞれ『花樟物語』第一章と『花樟物語』

第二章になることがわかる。また、物語は、殖民地台湾に渡った前田左門治と千代夫婦、そして長女八重と次女龍子を中心としている。人物と時間の設定からわかるように、「花樟」（一九四六年）、「左門治と千代」（一九四七年）と「老脚の賦」（一九四八年）はシリーズ作品と言えよう。人物設定と物語の概要からすれば、真杉家一族をモデルにした作品だと推定できる。

「花樟」とその続編「左門治と千代」の概要は次のようである。

前田一家は台湾南部の部落「旧城」（註：現在、台湾南部の左營）に住んでいた。妻・千代が長女・八重と次女・龍子のため、夫・左門治に内証で花樟木の箆筒と鏡台を嫁入り道具としてこしらえた。「花樟」の家具を持つことは部落内の日本人共同体には一種の身分象徴と同時に、また「内地」に戻るとき、「故郷に錦を飾る」という見栄の意味合いも含まれている。

次女の龍子は、このようなものは「立派すぎる」と思いながらも、満足していた。それに対して、夫の左門治は、「これで家の中を『台湾』に嚇かされてゐるやうな気がする」（一三）という感想をもらしながらも、妻の気持ちを感じなくもない。「花樟」の結末では、同じ部落の日本人医者の上がりの妻が自殺し、発見されたということである。その続編「左門治と千代」では、長女八重が台北高等女学校から旧城に戻り、母・千代が自分たちのために購入した花樟木の箆筒と鏡台を見ると、「辱められたやうな、赤い顔をして泣き笑ひの表情になつたわけ」で、「急に言葉を失ひ、小さくなつて部屋の間の方に身を寄せて坐」った。その後、父・左門治は、急に公学校の校長から、台湾人学生の無賃乗車をかばったり、台湾人女生徒の時間外授業を計ったりしたことを理由に、免職された。左門治が渡台以来、教職を免じられたのは、これで二度目である。左門治は七年前、最初免職された原因もこれに近いものである。それは大正

四（一九一五）年であり、妻・千代と次女・龍子が台湾に渡ってきた年でもある。一九一五年にはちょうど「タバコ事件」が起きて、台湾南部の政治情勢は緊迫していた。<sup>②</sup>当時、左門治は台中州下社頭公学校長を勤めていたが、学校の衛生設備を要求したことに對して、視学が、生徒の綴方を利用して、台湾人家庭内の不穩分子を摘出しようと考えていた。この確執によって左門治が清水巖公学校に左遷されてしまった。後にこの新しい土地で、「火事」の警鐘を土匪襲来の警報と取り違い、千代は社頭派出所までに駆けつけ、救援を求めた。結局、社頭より発した救援電信によって台中より、数多くの救援隊が駆けつけたが、空騒ぎと判明したことで、左門治が免職され、自殺まで凶ってしまった。しかし、千代に気づかれて止められた。

台湾における左門治と千代一家の物語は、以上のようなものであるが、「老脚の賦」の舞台は一九四五の東京に移り変わった。日本の敗戦によって台湾から引き揚げた左門治、千代、次女の龍子とその次男哲雄がさまざまな苦勞を重ねて鎌倉にたどり着いて、長女八重の家に身を寄せるといふ経緯である。

この三部作<sup>③</sup>を読めば、現実のなかの真杉の家族——明治末期以来、台湾で暮らしてきた両親、妹とその子ども——をモデルにしたことが明らかになっている。つまり、一見、真杉静枝の家族史のようなものであるが、日本の「台湾植民史」ともとらえられる。「花樟」とその続編「左門治と千代」における台湾描写は、ほぼ日本植民地政策に沿って描いたものなので、「台湾植民地私史」という視点から描いているものとも言えよう。

とくに注目すべきなのは、真杉静枝が自分の家族が台湾に移住してから、日本に引き揚げるまでのいきさつを、「花樟物語」と命名する点である。つまり、台湾植民地でのこの一族の物語は「花樟」を巡っているこ

とが明らかになっている。

樟木は、台湾の特産で樟腦の原材料として知られているが、また重要な経済的価値を持つ植物でもある。「花樟物語」においては、樟木ないし樟腦、それから「花樟」の由来について詳しく紹介されている。

樟樹の中でも、この狭い台湾島に密生してゐる樟樹のうち、芳樟と牛樟と二種類があつて、樟腦にするには芳樟でなくてはならない。牛樟には脳分があまりないのである。台湾の専売局が大正七年頃から、この芳樟の殖林に力を入れはじめたので、一方、牛樟の方は、天然に平地近くにも老樹となつて残つてゐるのが多くあつた。多分津軽さんのやうな商人の眼が、この牛樟に向けられたといふわけであらう。脳を採るのではなく、その独特の美しい木理を生かして、美術的な板材としての需用を思いついたのであつた。木材を板に挽いて、その木理を生かす為の材料になつたものを、「花樟」と称ぶやうになつたのである。（「花樟」六頁）

この引用文から分かるように、「花樟」という名称は、牛樟から来たもので、またこのようなものを、津軽のやうな商人が花樟と命名した。この時期は、ちょうど第一次欧州大戦の影響で世界市場の不景気が現れてきた頃である<sup>④</sup>。しかしながら、なぜ「花樟」がそのように日本人部落で騒がれて、もてはやされたのであろうか？ 樟腦は基本的には台湾植民地の重要な経済植物であり、その産量と品質は世界に誇るものでもある。「樟腦は、台湾産のものが、獨逸製人造樟腦の跋扈してゐる世界市場へ出て、立派にその需要量を勝つてゐるといふ風で、台湾特産品といふよりは、東洋の一つの誇りになつてゐた」<sup>⑤</sup>。また、「樟腦」、「樟木」と日本の台湾植民地政策との関係に遡れば、「樟腦」、「樟の木」という記号は、日

本の台湾植民地政策、特に日本の「理番」政策に深くかわるものだとわかる。樟腦がセルロイド (Celluloid) の原料である。一八九〇年代には、歴史上最初の人工の熱可塑性樹脂としてセルロイドが発明され、もてはやされた。第二次世界大戦以前、欧米諸国や日本などの工業国家において、セルロイドは重要な地位を占めていた。また、樟腦は、重要な製薬の原料であると同時に、一八八九年には一時、無煙火薬の原料ともなっていた。日本領台以前、日本と台湾とは、世界の二大樟腦産地であった。一八九五年領台以後、日本は実質的に世界の樟腦市場を独占したとも言えよう<sup>⑥</sup>。そのため、日本が領台した当年、一八九五年一〇月三十一日に、早速、「官有林野及樟腦製造業取締規則」を發布し、樟腦原料の樟木林を国有化した。その法律によつて、裏づけになる公文書や契約のない山林地は、みな官地になつてしまふ。このような政策は、表面的には、法律概念を台湾にもたらしたと見えるが、実は、日本領台以前、樟腦事業を独占してきた漢民族を排除しただけでなく、樟木林資源の国有を「合法化」したのである<sup>⑦</sup>。樟木と樟腦関係の新聞報道は台湾官報『台湾日日新報』が創刊した当時、さつそく現れ、また、樟腦専売に至るまでのいきさつからわかるように、総督府がいかにこの経済植物を重要視していたかということを裏付けている<sup>⑧</sup>。

上述した、日本の台湾領有以後の樟腦の経済価値の変遷からみれば、在台の月給取りの日本人にとつて、経済価値の高い樟木家具を手に入れることによつて「ソーシャル・ステータス」を高めることが可能である。植民地における日本人共同体のヒエラルキーがもともと歴然としていたため、その「経済価値」の力を借りて「身分価値」を高める効果が望まれているのである。それで、津軽のやうな商人が現れ、経済価値のより低い「牛樟」を「花樟」という華やかな名称に切り替えることによつて、日本人共同体における上述した心理構造の弱みをつきとめて、暴利を獲

得しようとしていた。「花樟」はまだ装飾用でもなく、また「家具としての実用でもない」、一種投機的な意味で以って、異郷暮らしの貯金帳にとつて代わつたやうな入り方で、中流所の月給とりの家々に配りつけられてゐたのであつた<sup>⑧</sup>。

また、「花樟」商人が台湾の日本人共同体におけるこのような競い合う心理を利用し、商売目的で装飾用でもない実用的でもないものを、台湾の日本人家庭に売り付ける実況は、前田家の近所の主婦の口を通じて、次のように語られている。

津軽さんから、月賦払ひで買つていらつしやる事を、何方のお宅でも内緒になさるのね。私の家ぢや、別段そんな事少しも秘密にはなりませんわね。——それにしてもね、私おかしい思ひますのよ。この一二年の間に、津軽さんみたいな「花樟」専門の商人が、この台湾にどれだけ殖えたかしれませんのですつてね。みんなお役所へ行つて主人連中に売り込んださうですけれど。——つまり、この方がずつと有利ですつて云ふんですよ。内地へ持つて帰ればたいへんな、値打ちですからつてね。台湾生活十年以上になる人で、この台湾特産の花樟を持たずに内地へ帰つては、恥ですよ。——なんて津軽さんは、まるで保険の官給するみたいなのを云ふんですつて。それですつて歩いてゐるんですよ」

(傍線筆者、「花樟」四頁)

上の引用文からわかるように、「花樟」のような商品は、実用価値あるいは経済価値より、結局植民地台湾における「月給取り」の日本人の虚栄心を満足させるために誕生した「台湾特産」であろう。「花樟」が家に置かれるため前田家のみすぼらしさを引き立てることは、長女八重が台北

から戻つて、母親が購入した「花樟」道具を見たとき、たんと漏らした感想からうかがえる。「私たちの家つて、なんて、暗い、汚らしい貧乏くさいものなんでせう。なんだか私は、今はじめてみるやうな」と言う。妹龍子は「だつて、御自分の家じゃあないの<sup>⑨</sup>」と言つたとき、八重はさらにこのように答えた。「自分の家でなければ、他人の家なら、どんな家だつて、大して不満には思わないわ。こんな筈だつて、少しも審美的には、とりえはないわ。無作法な成金好みよ。この家にはいよいよおかしなものだわ。どぎつくて……<sup>⑩</sup>」。つまり、「花樟」道具は自分の家とはいかに不釣合であり、そして強烈なコントラストを現しているのかがうかがい知れる。また、このような花樟道具を購入するため、母親の千代は、「一生懸命にお仕事をしたお金を、順に毎月払ひ込んで行つて、二十ヶ月払へなければ」ならない。成金趣味で見栄えを望むという植民地暮らしの「月給取り」の日本人心理の一側面がうかがえる。

### 3. 左門治の視点

#### —非「支配階級」からみる台湾植民地支配

左門治が日記の中で妻千代が花樟道具を購入した一件に対して、このように述べた。

なれど、妻千代の心中も亦可憐といふべし。彼女にして、亦その器の如く、我等の台湾生活より何ものかを克ち得んものと乞ひ希ふものなるべし。(中略) 看よ、本日よりわれが清潔を以つて誇りとせし家の内に、陋浅にして毒々しき未開未熟の作品入り来られるを。一瞥の瞬間にして、われこの家具類の嫌悪すべき甚だしきなるを感ず。これこそは現下台湾の現実をそのまま象徴せるものなりと謂ふべ

く。この事をもし妻にあからさまに云つて、それ難詰せんか、彼女は即座に答へて曰ふべし。『せつかくの台湾暮らしなれば、何物かを得て、内地土産としたし』と。(中略)台湾未だに未開地なり。共に正しき力をつくしてこそ幸福なれ。急ぎ一個の利を得んとて、実の青きを構はず、美術的にも、又、日本家屋にとつての調和の上にも、不完全なるをも顧ず、我が所有として内地へ持ち帰らんとす。現下のこの土地の行政官達、みな是なり、誰れか一人、丹心を留取するならんや。(「花樟」一四頁)

上記の左門治の心中からすれば、二点がわかる。一つは、「花樟」家具は「成金趣味」でそれを欲しがることは、まさに台湾の行政官に通じるところがある。また、左門治からすれば、「花樟」は「後進的な」台湾を象徴し、「聖潔」を誇る日本家屋にふさわしくない。左門治が台湾を「未開」な土地として見る「植民地者」のまなざしが「花樟」を通じて、反映されている。左門治の考えは、「下層階級」の日本「植民地者」の一面を現している。つまり、上級官吏が台湾という土地から何もかも剥奪し、利益先行の植民政策を批判しながら、「後進的」、「未開的」という見下す目線で植民地台湾を見ていた。また、この土地を向上させ、開発させることを自らのような「植民者」の責任と自認するのである。

一九一五年に起こった「タバコ事件」という抗日事件がきっかけで、左門治が左遷された。その原因も上述したように、「植民地台湾」政策をめぐって、上官と意見の不一致からきたのである。タバコ事件が起きた当時、左門治は台中州下社頭公学校長<sup>⑫</sup>を勤めていたが、公学校は「台湾人子供達のトラホーム、梅毒性湿疹はいよいよこの庄内に蔓延」という状態に落ち、「州に請求せし学童衛生用具はいまだ来らず、求めんにも当地にしては術もなし<sup>⑬</sup>」という。ちょうど巡視に來た新視学に対して、学

校の衛生設備を要求したが、視学が「阿緱廳下に先日蜂起したる匪徒の件につき、台湾人学童等の綴方に緊急の注意を」要望した。それに対して、左門治が「児童をとほして、日本政府の施すべきは、自愛のこの一路ならずや、サーベル政治はよろしくありませんよ。」と言ひ返した。視学が興奮して、「植民地にありては現下、教育者として、行政官の一人なり、よくこころ得られよ<sup>⑭</sup>」と怒った。

つまり、植民地教育方針と植民地支配のどちらか優先させるべきなのかをめぐる論争とも言えよう。左門治のような「理想主義者」で、そして支配の実権を持っていない「下層階級」は、厳酷な植民地の不穏な情勢に直面するとき、その政策に異議を唱えたとしても、敗北する運命をたどるのも必然的な結果と言えよう。作品の最後に、左門治は、自殺を持って台湾植民地政策とその執行者の官僚へ異議を申し立てようとしたが、千代に気付かれ、命が助かった。その三十年後、日本の敗戦にしたがい、左門治は、「いよいよ三十幾年の最後の日、その台湾の住みつくした土地を發つ時、午前三時といふ闇の中に、出發命令の信号が鳴り渡つた。リュックサック一個にすぼめられた、全財産に七十二才の足を蹴蹴かせて、引揚者の、蜿蜒たる行列の中に身を入れる時、左門治は、明治末期以来の台湾生活にかけた愛のさせる素直さで、只々、この歴史の厳肅さを、泣きながら歩き出してゐた<sup>⑮</sup>」。左門治の日本植民地支配の実況への観察を通せば、そこに現れている植民地者の鏡像は重層的で相互に葛藤していることがわかる。また、台湾、そしてそこにいる被植民者への感情の振幅も典型的な「植民者」的なものではない。左門治の観察には、台湾における植民者社会にめつたに浮上しない中下層階級の声を浮き彫りし、また、政策決定権を牛耳る上級官僚以外の、在台日本人の植民地政策への批判の声が伝わってくる。

## 4. 結びに

左門治の「花樟」、そして「タバニ事件」への批判は、暗々裏に日本の台湾における植民地政策へ向けた批判とも言えよう。「樟脳」が必要とされ、より多く樟木林を増やすため、「原住民」をその元来の生息地から追っ払った<sup>⑥</sup>。佐久間左馬太総督の「五年理蕃計画」は、まさに「樟脳事業」を拡張するための経済要素に左右されたものとも言えよう<sup>⑦</sup>。また、樟木を介して、行われた「経済搾取」は台湾の住民にとどまらず、「植民地者」の下層階級にも及んだ。「脳分」の少なく、経済価値の少ない「牛樟」は「花樟」という華やかな名前の改装によって売り付けられ、「二十カ月」の分割でやっとな手することが出来る。「タバニ事件」は、八百人以上の無差別の死刑判決があまりにも厳酷で、日本帝国議会もそれに対して注意した。この抗日事件は、後に一九三〇年の「霧社事件」を除いて、漢民族の最後の大型抗日武力事件といわれ、それ以後の台湾抗日運動路線を変更させた。一九二〇年より文化協会の「社会運動」は「武力蜂起」を放棄し、「社会改革」という「温和的」な抗日路線となった。また、プロレタリア文学運動にも少なからぬ影響を与えたとも言える。たとえば、台湾の代表的な左翼文学者・楊逵の出世作「新聞配達夫」(一九三四年)では「タバニ事件」における蜂起者への惨殺ぶり、そして当時の殺伐的雰囲気主人公楊君の脳裏に刻まれている描写が見られる。「平地蕃人」、「総督府模範竹林」(一九三〇年)など台湾関係のプロレタリア文学作品を創作した伊藤永之介は、「模範竹林」の中で「タバニ事件」をモチーフとして、後の台湾における労働運動とのつながりを描いて見せた。「経済政策」と「武力征伐」という植民地政策への批判は、左門治の台湾暮らしの一九一五年と一九二二年の日記から読み取れるであろう。また、このような作品が、日本の敗戦の直後、直ちに元プロレタリア文学

者が集結した『東北文学』で発表された意味もこれから探求しなければならないと思う。左門治と千代一家は、「植民地」の日本人共同体の「下層階級」に属しながら、つねに辞令次第で移動させられなければならない。デラシネの生活を送っていた。それから、日本敗戦と同時に惨憺に極まる「引揚者」となり、「内地」に戻った。しかしながら、左門治たちの居候によって、長女八重夫婦の仲にもつれが生じてしまい、左門治一族は、安住の地を求めるため、ふたたび果てなく旅を続けることを余儀なく強いられた。この一家の植民地台湾における「家族史」は、まさに日本の台湾における「植民地史」の縮影とも言えよう。

## 注

- ① 河原功「解説」『ことづけ』(ゆまに書房、二〇〇〇年)、三頁。
  - ② タバニ事件は一九一五年に台湾台南タバニに起こった大規模の武力抗日事件である。首謀者余清芳、羅俊と江定は「西来庵」という寺を拠点に蜂起したため、「西来庵」事件ともいわれる。一九一五年八月二日に余清芳が逮捕され、八月二十五日より臨時裁判が行われた。一九五七人は「匪徒刑罰令」によって告発され、そのうち一四一三人が起訴された。八八六人が死刑の判決を受け、四五三人が禁錮判決を言い渡された。厳罰のあまり、帝国議会の注意を受けて、九五人の死刑が執行された後、残りの死刑囚は有期禁錮となった。(日本語訳は筆者による。以下同)
- 『台湾大百科全書』  
<http://taiwanpedia.culture.tw/web/content?ID=3730&Keyword=%E5%99%8D%E5%90%A7%E5%93%96%E4%BA%8B%E4%BB%B6> (二〇一〇年八月一日確認)。
- ③ 現在、発見された、左門治と千代を主人公とする「花樟物語」は、この三作のみである。話筋の発展と作中における時間の設定は、一貫している。本文は、この三篇の作品を「三部作」として命名し、論じることになっている。
  - ④ 真杉静枝「花樟」(『東北文学』一九四六年三月～四月)、五～六頁。

- ⑤ 同前、六頁。
- ⑥ 林滿紅『茶、糖、樟脳業與台湾社会經濟變遷（一八六〇～一八九五）』（聯経出版、一九九七年）、三三三頁。
- ⑦ 藤井志津枝『理蕃』（文英堂、一九九七年）、一三～一九頁。
- ⑧ 「樟脳専売瑣談」『台湾日日新報』（二八九九年七月二日～八月三日）。同前。
- ⑨ 真杉静枝「左門治と千代」『東北文学』（二九四七年一月）、七四頁。同前。
- ⑩ 日本植民地期において、公学校は、台湾人児童のために設けられた国民義務教育を受けさせる学校である。日本人児童が通うのは小学校という。同前。
- ⑪ 真杉静枝「老脚の賦」『仇よみ』（鏡書房、一九四八年）、四三頁。
- ⑫ 「蕃族物産」『台湾日日新報』（二八九八年一〇月二二日）。

⑰ 「五年理蕃計画」は一九一〇年台湾総督府の制定された台湾原住民に対する武力鎮圧の行動テーゼである。一九一〇年から一九一五年まで計画的に全台の原住民を武力鎮圧し帰順させると考えていた。しかし最初の征伐は北部のタイヤル族を目標としていたが、その抵抗は予想以上激しかったため、計画とおり、行かなかった。さらに一九一四年の「タイロコ蕃」征伐は、高齢七〇歳の総督佐久間左馬太が自ら戦場に向かい指揮を執っていた。征伐が終わり、佐久間は自ら天皇に「理蕃計画完成」と報告し、総督を解任された。一九一五年七月安東貞美が就任し、原住民の武力征伐政策を取りやめた。『台湾大百科全書』

<http://taiwanpedia.culture.tw/web/content?ID=3720&Keyword=%E4%BD%90%E4%B9%85%E9%96%93%E5%B7%A6%E9%A6%AC%E5%A4%AA>

（国立政治大学台湾文学研究所准教授）